

會學濟經學大國帝都京

# 叢論濟經

號二第 卷五十第

行發日一月八年一十正大

## 論叢

交通税の捕捉すべき給付能力

法學博士 神戸 正雄

支那の古典に見られたる社會政策

法學博士 田島 錦治

經濟道と經濟術

法學士 作田 莊一

小作制と小作法

法學博士 河田 嗣郎

## 時論

支那の改造と國際管理

法學博士 末廣 重雄

戸數割を論ず

法學博士 小川 郷太郎

物價問題私論

法學博士 山本美越乃

## 說苑

ジョン・ロックの私有權論

經濟學士 岩城 忠一

## 雜錄

經濟學の革命

法學博士 河上 肇

大學生の一年間の學費

經濟學士 藤野 靖

# 物價問題私論

山本美越乃

我が國の物價は戰爭以來漸次騰貴の趨勢を持續し來れるも、之と共に戰爭の餘澤として一般に國民の所得の増加したることは、物價の騰貴に對しても大なる苦痛を感せしむることなくして近時に及べるも、戰後對外通商の不振、一般事業界の沈衰、國民所得の減少等の反動時代に入るに及びて、物價問題は啻に直接國民の生活を威嚇する重大問題として注意せらるゝに至れるのみならず、左なきだに戰後各國の經濟財政上に於ける緊縮方針は能ふ限り輸入を制限して輸出を獎勵せんとする大勢に向ひつゝあるに、我が物價の趨勢現状の如く頗る不廉なるに加へて、戰時中市場の擴張に全力を傾注すべかりし時代に、商取引上に國民の深慮を缺ける行動の多かりし爲に、今や輸出貿易は不振の極に達し、（我が對外貿易は戰時中には相當の發展を遂げたるも戰後は全く其の勢力を失墜し、大正八年以後は貿易狀態は輸入超過の傾向に轉じ、昨年上半年に至りては入超額二億三千餘萬圓に達せしより世人は驚きの眼を以て之を視たるも、本年に入りて形勢一層非となり、既に一月以降五月迄に三億五千餘萬圓の輸入超過をなすに至つた、併し國內に於ける物價の狀態今日の如くんば對外貿易の順調を見んこと前途尙は遙遠であると言はねばならぬ）延

て一般産業上の活動に一大打撃を與ふるに至つた。

之を我が國の産業的發展の運命に就きて考ふるに、農業は古來國民の生業として頗る重要視せられ、又恐くは將來と雖も我が國民の主要食糧品に一大變革を來さざる限りは、農業の地位は著き變動を受くることなかるべしと雖も、由來農業は其の性質上自給的の産業に屬し、殊に米作を主とせる我が農業は此の本質を最も能く代表せるを以て、我が國に於ては農業の盛衰は他の産業の如くに顯著ならざる事情がある、然れども一國の産業が未だ自給的の性質を脱せざる時代には國富の増進は之を期待すること難く、産業の國際化換言せば其の國の産業が國際市場に交渉を有するに至りて、初めて眞の意義に於ける國富の増進を期することを得るのである、從來農は國の本にして商工は富の基なりと謂へるは簡單に此の意を言明せるものに他ならぬ、既に自給的産業の開發に於ては相當の發達を遂げ、過去數百千年間國本の培養に努め來れる我が國民は、今や眼を國際的の産業に轉じて國富の基礎を益々鞏固ならしむるの必要に迫られつゝあることは茲に細説する迄もない。

而して國際産業競争場裡に處して成敗利鈍の分るゝ最大原因は、一に其の生産物の『品質の優良』にして『價格の低廉』なりと云ふ點にある、然るに生産物の『品質の優良』を期せんと欲せば、常に科學的研究の結果に立脚せる生産技術の不斷の改良進歩に待たざるべからざること勿

論なるも、併し之のみを以ては未だ充分なりとしない、之に加ふるに國民の産業道德換言せば産業上の活動を常に道義觀念の指導の下に置くに非ずんば、『品質の優良』なる貨物を市場に供給するが如きことは之を期待するを得ない、大なる自利心は結局大なる他利心に一致すべき理を悟らず、唯眼前の小利にのみ眩惑して永遠の大利を忘るゝが如き國民には、生産物の『品質の優良』を望むことは不可能である。

次に『價格の低廉』を期するには結局物價形成の諸種の要因を研究し、其の如何なる要因が直接又は間接に物價を騰貴せしむる原因となりつゝあるかを精査して、之が對應策を講ずるより他はない、一般的に之を論ずる時は凡そ貨物の價格の決定上に重大なる關係を有するものは、實に其の供給狀態の如何にあると云ふことが出来る、即ち所謂需要供給の法則に従ひ貨物の供給量の増加は其の物の限界效用換言せば使用價值を減少せしめ、從て其の價格を下落せしむるも、供給量の減少は之に反して使用價值を増加しめ、從て其の價格を騰貴せしむるものである、而して通常は貨物の供給量は其の物の生産狀態に依りて決せらるゝも、間接には又其の分配狀態の如何も供給量に重大なる關係を有することを忘れてはならぬ、故に物價問題の解決は生産及分配の兩方面に關係を有し、是等の兩方面より之が對策を講ずるに非ずんば完全を期することを得ない。

先づ生産の方面より貨物の供給量の増減問題に付きて考ふるに、茲にも農業的生産と工業的生

産との間には根本的に異なる事情がある、一般に之を論する時は農業は自然に依頼すること最も大にして、他の生産要素たる勞力及資本の協力は寧ろ補助的の性質を有するに過ぎぬ、即ち如何に勞力及資本を投ずるも自然の恩惠の小なる所に於ては生産の結果を大ならしむることは出来ぬ、然るに工業は之に反して勞力及資本に依頼すること甚だ大にして、自然の如きは寧ろ従たる地位に在る、蓋し工業は其の目的自然に依りて供給せられたる物質を加工又は變形して人類の新なる慾望に適應せしめんとするに過ぎぬからである、故に農産物の増減は主として自然力の如何に依りて決せられ、工産物の増減は主として勞力及資本の協力如何に依りて決せらるゝと稱して可い、又農業に於ては其の基礎的要件を成せる土地の生産力に限りあるが故に、勞力及資本を如何に増加するも一定の限度を越ゆる時は勞資の増加に比例して其の生産額を増加せしむることは困難である、即ち農業には報酬遞減の法則の現はるゝこと比較的敏速なるも、工業に於ては其の基礎的要件を成せるものは前述の如く勞力及資本なるが故に此の法則の現はるゝこと頗る遅緩にして、勞資を増加するに従ひ或程度迄は生産額も之と比例して増加する相違がある、此の如く農業と工業との間には主要なる生産の要素に關して根本的に異なるものがある、從て農産物の供給の増減は人力を以て如何ともすべからざるものあるに反し、普通の工産物の供給の増減は任意に之を左右することを得るのである。

上述の如く工業は農業と異なり、勞力及資本を生産の主たる要件となすを以て、工業的生産物の價格決定の基礎となるべき生産費なるものも、亦主として勞力及資本に對する報酬より成ることは想像するに難くない、此の見地よりせば賃金低廉にして利率低き場合に於ける工業的生産物の價格は、然らざる場合に於けるものに比して廉なるべきは論を俟たぬ、凡そ物價の引下げを主として生産の方面より斷行せんと欲せば、結局生産費の節約を計るより他に途なきも、生産費の節約は勞力及資本に對する報酬の低下に待つに非ずんば其の目的を達すること能はざるが故に、生産の方面より物價の引下げを可能とするや否やは、要するに賃金及利率の引下げを可能とするや否やに依りて決せらるると云ふも不可なし。

然るに今醸て之を我が國の實況に徴するに、物價騰貴の割合賃金増加の割合よりも大なる現狀の下に於ては、先づ賃金の引下げを斷行して然る後に物價を低落せしめんとするも這は頗る困難にして、少くとも日用品の價格の低落は賃金引下げの先行要件とならねばならぬ、之を一般勞働階級に就きて考ふるに、彼等の賃金の大部分は日常の生活資料即ち衣食の爲めに消費せらるゝが故に、日用品の價格を低廉ならしむることは最先の急務であると言はねばならぬ、然かもこは決して實行不可能のことに非ずと信する、蓋し各種の食糧品及普通衣の材料として用ひらるるが如き物資の價格の引下げは、一方に於ては内地の産業に對する有害無益の保護主義を廢し、

他方に於ては國民一般に生活資料の浪費を戒しむると共に、又斯かる物資の供給者に對しては事業利益に一定の制限を附せしむる方針に出づる時は、今日より日常品の價格を低落せしむること敢て難事に非ず、此の如くして日常品の價格の低落するを待ちて賃金の引下げを斷行せば、労働者は假令名義的賃金即ち貨幣を以て支拂はるべき賃金に付きては減少せるが如き觀あるも、實際的賃金即ち生活の必需品及享樂品を以て測られたる報酬には著き相違なきより、賃金の引下げに對して特に苦痛を感ずるが如きことなかるべし。

利率引下げの實行に關しては賃金の引下げよりも更に多くの可能性を有す、近時一般消費者及勞働者等は物價の騰貴從て生活の困難に苦みつくある半面に於て、資本家は尙ほ其の放資より少からざる利益を收め、若し其の利益の減少するが如き虞れある場合には、或は生産又は販賣の制限を爲し、或は同業者間に互に賣價を協定する等の方法に依りて其の利益を失はざらんことに努め、斯くして不況時代に在りても尙ほ其の收むる所の利益の割合は決して少しとしない、故に此の際資本家の所得に歸すべき利率其の他一切の利益の配當に一定の制限を設けんとすることは、毫も不當の要求と稱すべからざるのみならず、此の如くに爲すことに依りて初めて從來資本家に對して放たれたる批難攻撃の聲をも之を緩和せしむることを得るのである、而してこは輿論の後援如何に依りては賃金の引下げ問題よりも比較的容易に其の目的を達し得らるゝものゝ如くに思

はる、此の如くして低廉なる資金及資本を用ひて更に多くの生産を爲さしめ貨物の供給量を増加せしむることは、物價の低落を誘ふ有力なる原因となるのである。

次に分配の方面より貨物の供給量の増減問題に付きて考ふるに、貨物の存在量は同一なりとするも之が配給機關の整否に依りて其の供給量に不同あることは、日常の實驗に徴して殆ど説明の要を見ない程明かなる事柄である。例へば交通運輸機關の設備、各種の運送機關の賃率關係、中央及地方に於ける市場制度の完否、取引所の組織及取引の慣習、中間商人の多少等は直接間接に貨物の供給量を左右し、延て其の價格に影響を及ぼすが故に、物價の調節を計らんと欲せば是等の機關の組織系統等に關しても亦一大整理を斷行して、能ふ限り貨物の供給量を潤澤ならしむることに努むる必要がある、此の見地よりせば汽車汽船其の他大小の交通運輸機關の設備を完成すると共に其の賃率を引下ぐること、公設及私設の市場制度の普及を計ること、産業組合殊に購買組合の組織を奨励すること、中間商人の暴利を取締り販賣區域及價格の協定等に關する制限を撤廢せしむること等は、物價引下げ問題の考察に付きては特に攻究を要すべき事項である。

以上は貨物の供給量と物價の關係に付きて注意すべき點を要言したのであるが、更に又他方より之を觀察せば、物價なるものは要するに一物が他物との關係に於て有する交換價值を、通貨を以て表示せるものに他ならざるが故に、其の表示せらるゝ通貨の量の多少換言せば通貨の價值の増

減に依りて増減あるべきは勿論である、即ち通貨膨脹せば物價は騰貴し、通貨收縮せば物價は下落すと一般に稱せらるゝは此の理を言ひ表はしたるものである、而して我が國の今日の物價騰貴は又此の關係に原因せるもの、決して少くないことは既に周知の事實である、然るに之と關聯して茲に一言すべきは、近時物價の調節に關して有力なる説として傳へらるゝ所に據れば、本來物價問題は之を生産の方面より解決するを正當とすべきも、我が現狀の下に於ては寧ろ消費の方面より之が解決に努むべきである、換言せば物價の引下げは國民の自省に基く消費の節約を待ちて初めて解決を望み得る問題であるとの説が相當有力なるもの、加くである、此の説は固より正面より之に反對すべき理由もなければ、又之を以て全然謬見なりとして排斥し去るべき理由もない。併し此の説を裏面より解釋する時は、所謂物價問題に付きては人爲的に之を如何とも爲すことを得ない、國民各自が物價騰貴の苦痛を自ら體驗して其の消費を節する時機の到來する迄は、物價調節の策なしと言ふに歸着し、刻下の急務たる物價引下げ問題とは殆ど交渉を有せざる自然的調節と化し去るのである。此の如き自然的調節論は經濟社會の正常的發達を遂げつゝある時代に於ては兎に角、現今の如き常規を逸せる時代には之を以て物價調節の第一義となさんとすることは、敢て誤りに非ずとするも少くとも迂遠の譏りは之を免るゝことを得ない、放蕩の習慣性を有せる者に對しては其の自覺を説かんよりは、先づ彼等の財囊を奪ふの有效なるに如かざるが如く、今

日の我が國民に對しては自覺を説く前に先づ通貨を收縮して其の財囊を輕からしむることが最も有効である。

最近に於ける我が國の兌換券の發行高は、之を戰前に比較する時は三倍強の増加を示しつつあるも、之と共に又各種の取引關係も戰前に比較せば著く増加せるを以て、現今の物價騰貴の原因を通貨の膨脹にのみ歸せんとすることは妥當を缺くも、併し是等兩者の間に殆ど因果關係なきものゝ如くに強辯せんとする一部論者の説の謬見たることも亦疑を存しない。故に通貨の收縮は物價の調節には有効なる一手段たるべきも、唯徒に利子の引上げに依りて通貨を回收せんとするが如きは、左なきだに利子歩合の高き我が國に於ては却て産業社會に悪影響を及ぼす虞れあるが故に、寧ろ近時の輸入超過の趨勢を利用して金の輸出を自由ならしめ、或は國外に於ける有望なる事業に對して資本を放下するの途を教へ、或は汎く其募集に應じ得る様比較的小額の公債を發行すること等に依りて、通貨の收縮に努むるを安全とする。

要之、我が國は其の産業的發展の運命より考察して永く自給的の産業に安んずべきに非ずして、更に進んで國際的産業の振興に全力を傾注せざるべからざる状態に存すること前述の如くなるに拘らず、之が唯一の武器たる『品質の優良』及『價格の低廉』に關しては、現状の如くんば到底他國と競争するを得ずとせば、假令他の點に於ては所謂強國の班に列し得べき資格ありとするも、國運の

消長に最も重大なる關係を有する國際産業競争に於ては、結局落伍者たるの運命を免るゝことを得ない、之れ我が國民の到底堪え得べき所ではない、果して然りとせば「品質の優良」及「價格の低廉」を期せんが爲めに、舉國一致の態度を以て産業政策及物價政策上に一大革新運動を必要とするべき時機に今日は迫りつゝあると言はねばならぬ、殊に物價の問題は常に對外的の關係に於てのみならず、對内的の關係に於ても頗る重大なる意義を有し、其の解決如何は延て國民の思想上にも甚大なる影響を及ぼすが故に、如何なる方面よりするも苟くも物價を低落せしむべき力あるものは萬難を排して之が實行に努むると共に、國民各自も亦從來の如き放漫なる浪費の惡風を戒め、上下心を一にして此の國際的存立の危機に處すべき方法を眞摯に講究せなければならぬ。

(附言)本論は主として工業的生産物の價格問題に就きて意見を述べたものであるが、農業的生産物の問題に就きては別に稿を改めて論じて見ようと思ふ。